

電柱 にまつわる イトセトラ

♡成写真



4 世紀の電柱

カエルが頭を踏んづけていった。しかし、私は何の抵抗もできない。なぜなら首から下が地面に埋まっているからだ。そのうち、首から上も地面に埋まるだろう。今はそれまでの猶予期間である。

3年前、私の体が自由だったころは、日々の食糧を収集する毎日だった。あの頃はかなりの不作で、いつもなら村の倉庫に行くと手のひら一杯分のコメをもらえるはずが、全くもらえなくなってしまった。だから私は毎日釣りをして魚を食べた。魚以外ではコメの代わりにトチの実をよく食べた。トチの実をよく煮ないと苦くて食べられない。子供の頃はトチの実を煮ないで口にして、あまりの苦さに3日間寝込んだほどだ。

寝込んでいるときはNHK教育テレビを見るというのが子供時代の定番だ。しかし、私が生きていた時代は、テレビもないし、ラジオもないし、車も全く走っていないし、ピアノもないし、バーもないし、電話もないし、ガスもないし、バスも1日0本だ。こんな村嫌だと言ったところで、そんな便利なものはどこに行ってもないと相場が決まっている。

病で寝込んでいるときには身を横たえながら小さい埴輪を作る。大人も子供もそうするのだ。それが常識というものだ。小さい埴輪を10個つくると、おおよその病気は治ってしまうと村長が言っていた。私もそう思う。埴輪には強い力がある。病気の時につくる埴輪は水鳥の埴輪が相応しい。病を持って飛び去ってくれるのだ。トチの実を煮ないで食べて寝込んだ時には水鳥の埴輪を14個作った。10個でも治らなかったので、さらに4個作ったのだ。それほどトチの実には苦いのだ。よく煮なければいけない。木を燃やしてつくった灰を鍋に入れてグツグツ煮る。沸騰したらトチの実を放り込んで1日煮続けるのだ。そうすると苦いトチの実がとても香ばしい食べ物になる。私はトチの実が大好きである。しかし、コメはもっとうまい。コメが食べられない日々は残念な日々である。

私が発明した食べ方に「トチ魚」というものがある。川で釣ってきた魚にトチの実をすり潰したものを塗ってから火で炙るのだ。魚からポタポタ油が垂れてきたら食べごろである。普段はトチの実をよく煮て苦くないようにするのだが、「トチ魚」の時は少し苦いほうがいい。だから、いつもよりはトチの実を煮ないで鍋から取り出して、丸い木の棒ですり潰すのだ。そして魚に塗る。塗る量は自分の好みだが、私はたくさん塗った方がうまいと思う。この料理を発見したときには美味すぎて、あまりの嬉しさで、隣に住んでいるトヨにすぐ「トチ魚」を持って行った。トヨはそれを食べて「わーわー」と言った。「わーわー」と言ってくれるなんてよほど美味かったのだと思う。私が初めて食べたときは「わー」と1回だけしか言わなかった。しかし、トヨは「わーわー」と2回言ったので、私より美味いと感じたのだと思う。トヨは感じやすい女だ。トヨは私が胸を触っても「わーわーわー」という。この時は3回言うことが多い。私以外の人はトヨの胸を触ることができない。触ろうとするとトヨは怒るからだ。しかし、私はトヨの胸を触ることができる。たぶん「トチ魚」を最初に食べさせてあげたからだと思う。トヨに最初に食べさせて良かった。トヨに食べさせた後には、村の人みんなに食べてもらった。みんなも「わー」と言ってくれた。その日から私は「トチ」と呼ばれるようになった。名誉なことだ。村長も私を「トチ」と呼んでくれる。私はその後にも「トチ魚」を発展させるように色々食べ方を工夫

した。新しい食べ方を思いついたときは、いつもトヨに最初に食べてもらった。食べてもらった後に胸を触ると、トヨは「わーわーわーわー」と4回言う。トヨは感じやすい女だ。きっとヒミコ様のような偉大な女になると思う。今、私は地面に埋まっているのでトヨに会うことができない。なぜなら一切動けないからだ。私の首から上が土に埋まる前にトヨが会いに来てくれればいいのだが、ここには村の人は近づけないと思われるので、たぶんトヨにはもう会えないと思う。とても残念だ。もう少し胸を触っておけばよかった。私はトヨが「わーわーわーわーわー」と5回言うのは聞いたことがない。あと少しで5回言いそうだったところなのに、もうそれも聞くことはできないだろう。なぜなら首から下が地面に埋まっていて、そのうち首から上も埋まってしまいうだろうからだ。

数か月前、村長のもとにヒミコ様の使者が来た。なんとヒミコ様が「トチ魚」の噂を聞いてそれを食べたいからトチという男を連れてこいと言ったというのだ。村長は一も二もなく承諾した。だから私はヒミコ様のもとへ行くことになったのだ。私はとても誇らしかった。まさか「トチ魚」がここまで有名になるとは思わなかった。美味しいものはすべてを変えてしまうのだ。ヒミコ様のもとへ行く前の日にトヨに挨拶をしに行った。しばらく会えなくなるだろうから「トチ魚」を持って行った。トヨはうつむき加減で私に「本当にヒミコ様のところへ行くのか」と聞いてきた。私は「本当に行く。それはとても名誉なことだ。」と言った。トヨに「トチ魚」を渡して、すぐに胸を触ったが、トヨは「わー」と1回しか言わなかった。たぶんその1回は「トチ魚」がうまかった分の「わー」で、私が胸を触った「わー」ではないと思っている。トヨは時々感じやすすくない女になる。

ヒミコ様のもとで私は「トチ魚」を作った。大変好評で、ヒミコ様は「わーわー」と2回言った。そして、ヒミコ様は私に近づいてきて私のことを褒めた。「お前は大変優秀である。」と言った。私は誇らしかった。ヒミコ様はひとしきり私の体を眺めると、突然、私の股間を触ってきた。私は少しびっくりしたが、「わーわーわー」と3回言ってしまった。ヒミコ様は「お前のここはハシラのようなようだ」と言った。私は「ハシラとは何ですか？」と聞いた。私はハシラという言葉は初めて聞いたからだ。ヒミコ様は建物の屋根を支える太い木の棒を指さして「これがハシラだ。」と言った。私は「そうです、私はハシラのようなです。」と答えた。するとヒミコ様は「お前はハシラのようなだから、私の家のハシラになるのだ」と言った。私はヒミコ様のお役に立てるのであればなんでもしなければならぬと考えていた。だから私は「ぜひハシラにしてください。」と言った。ヒミコ様はトヨより胸が大きい。そのとき、私はヒミコ様の前に立つとドキドキしてしまうことに気付いた。だから私は「ヒミコ様、私はヒミコ様の胸を触りたいと思います。」と言った。しかし、ヒミコ様は「ダメだ。」と言った。私はとても残念だったのでヒミコ様が後ろを向いたときに勝手に後ろから胸を触った。するとヒミコ様は「わーわーわーわー」と4回言った。そして、ヒミコ様はこちらを振り向いて、「お前はハシラになるべきだ。」と言った。私は「ぜひハシラにしてください。」と言った。

その後、私はハシラになるためにヒミコ様の屋敷の真下にあたる地面に埋められた。首から上は地面から出ているが、そのうち首から上も土が盛られるだろうと思う。私はハシラとして地面からヒミコ様の屋敷を支えるだろうと思う。あの屋根を支える太い棒みたいに。

今日は地面に埋められてから7日目だ。私はまだハシラになり切っていないと思う。どうやったら本当のハシラになれるかよくわからない。じっとしていればいいのだろうか。動けないからじっとしているしかないのだが。ときどき、カエルとかネズミが私の頭の上を通ったり、顔にぶつかってきたりする。それがとても厄介だ。そのように考えていると、後ろの方から、「トチ魚」の匂いが漂ってきた。私は振り向きたかったが、埋められているので首が全く回らない。しかし、匂いはどんどん近づいてきて、ついには私の頭を通り過ぎ、目の前に「トチ魚」が現れた。「トチ魚」を持ってきたのはトヨだった。トヨは私の口に「トチ魚」を突っ込んできたので、私は否応なくそれを食べることになった。久しぶりに食事をとったが、やはり「トチ魚」はうまい。私は「わーわー」と2回言うと、トヨはニコリと笑った。そして、トヨは私の周りの地面を掘り始めた。腰をかかめていないと屋敷の床に頭がぶつかってしまうので、トヨは大変無理な格好で地面を掘っている。私は「地面から出てしまうとハシラになることができない。」と言った。するとトヨは「ハシラになる必要などない」と言った。私は「いや、ヒミコ様がハシラになれと言ったのだ。」と言った。トヨは「ヒミコ様のいうことなんか聞かなくていい」と言った。ヒミコ様の言うことをきかなくていいなどというトヨはやはり偉大な人物だと思った。そして、よく見ると、トヨの胸の方がヒミコ様の胸より大きいことに気付いた。多分、いつもは胸を布で縛り付けていたのだ。だから私はハシラになることをやめて、地面から抜け出してもよいと思った。そうすれば、トヨの胸を触ることができる。トヨはしばらく私の周りの地面を掘り続け、ついに私は地面から抜け出すことになった。私はすぐにトヨの胸を触ると、トヨは「わーわーわーわーわー」と5回言った。私はとても満足だった。

誰にも分からないように振る舞っている。なるべくその他大多数と同じにいられるように、溶け込めるように生活する。目的地はどこでも構わない。できれば、今までに行ったことのない所が良い。海でも山でも良い。でもそういうわけにはいかない。分かりきった場所にしか行くことが出来ないのだ。

産まれたときから私の顔は酷く不気味だったらしく、父も母も私のことを世間の誰にも話さなかった。私が産まれるとすぐ、親戚のいない土地に引っ越し、その土地でさえ私の存在を無かったように過ごしたのだ。だからいつも私は独りぼっちで、遊び相手になってくれたのは母が作ってくれた人形だけだった。私はその人形といつも遊んでいた。人形が擦り切れるまで遊んだ。人形が擦り切れるとすぐ、母が縫い合わせてくれた。その人形は私が覚えているだけで、365回は母に縫い合わされたと思う。一度首と胴体が綺麗に分離したことがあり、母が間違えて首を後ろ向きに縫い合わせてしまったこともあった。手が足の部分に縫い合わされたこともあったし、鼻が逆さに縫い合わされたこともある。母は父と同じように朝から晩まで働いており、毎日酷く疲れているようだった。だから私は、私の人形をいつも縫い合わせてくれる母に本当に感謝していた。

父も私にはとても優しくかった。私が退屈そうに人形と会話をしていると、「こっちへおいで」と私を膝の上に乗せて、新聞を読んでくれたものだ。かならず父は社説を一番最初に読み、それについて感じたことを私に話すのだった。その時間は私にとって人形と遊ぶよりも退屈な時間だった。父は優しくかったが、社説が退屈だったのだ。私はそれ以来、社説というものを毛嫌いするようになった。社説が一つ残らず世の中から消えたら、父はもっと私のことを好きでいてくれるに違いないと思った。

ある日、父と母が離婚した。原因についてはよく分からなかった。もしかしたら父の社説を、母も嫌いだったのかもしれない。とにかく父と母は失敗したのだ。父は新聞を振り回しながら母に怒鳴っていた。母は私の人形をちぐはぐに縫い合わせながら泣いていた。数日間父は怒り続け、母は泣き続けた。私の人形はもう原型をとどめない形で縫い合わされてしまった。私の人形はまるでとうもろこしのようだった。

私を引き取った母は今まで以上に働くようになり、私の人形を縫い合わせてくれなくなった。私の人形は真っ白な灰になるまで私に擦り切らされ、私の話し相手はどこにもいなくなってしまった。話し相手がいなくなってしまった私は1人で声を出して遊ぶことにした。知っている単語を順番に言い、知っている単語がなくなると、もう一度はじめから知っている単語を言い直した。私は生まれてから一度も声を出したことがなかったから、私の声を聞いた母は気が狂ったように喜んでくれた。父と別れてから、母にも話し相手がいなかったのだと思う。私の話し相手は人

形から母になった。母の話し相手も人形から息子になった。それは私たち家族にとってとても大きな前進だった。

私が話す単語はとても難しいものが多かった。いつも父が社説を読み聞かせてくれていたからだろう。私は大嫌いな父の社説からより多くの言葉を学んでいたのだ。母は私が難しい単語を言うと、とても喜んでくれた。私はだからより難しい単語を選んで話すようになった。母とは会話にはならなかった。私が単語以外のことを言わないからだ。

母は売春をするようになった。生活がとても厳しかったので、それは致し方ないことだった。6畳しかないアパートに男を連れ込んできては、私の横でセックスをするのだ。母の声のトーンで、母がその男たちをどのように思っているのかが分かった。ある男の時の母はっけんどんな態度を取り、ある男の時の母はとても嬉しそうだった。私は母が嬉しそうにしているのが好きだった。母は売春をするようになってからの方が生き生きとしている。より多くの人間が、母には必要だったのだろう。母の売春は、ある日から母の支えになったのだ。私もだから母が売春することがとても嬉しかった。沈んでいる母よりは、売春している母の方がマシだ。

母が売春している横で私はいつも単語を連呼していた。私は男が来るたびに、より張り切って政治的な単語を連呼した。ときどき母は、私が難しい単語を言うと、男の射精が遅くなるからと、私の口にガムテープを貼ることがあった。私はガムテープを貼られていても、構わずに単語を言った。それは声にならない声だったに違いない。私は母の喘ぎ声を聞きたくなかった。私は母が知らない男にイカされるのが嫌だった。母をイカすと男はたちまち有頂天になって、もうすでに母を完全に自分のものにしたかのように振る舞った。そんな時、母はとても嬉しそうにするのだった。母が嬉しいことは私にも嬉しいことだった。しかし母は私だけのものだった。仮に母が隣人に苦情を言われるほど大声でイッたとしても、母は決してイカせた男のものではないのだ。

母の身体の常連になった男たちは、決まって私にお土産を買って来てくれた。お土産といっても簡単なもので、大抵はコカコーラとか安い駄菓子だった。常連客はまず私にお土産を渡し、「あとで食べなさい」と言って私の口をガムテープで塞ぐのだった。そして満足すると、母にお金を払って帰っていく。男が帰ると母は私にあやまりながらガムテープを外し、シャワーを浴びるのだ。私は母がシャワーを浴びているとき、母に聞こえないように「コカコーラ、コカコーラ」と連呼した。売春してまで私を育ててくれる母に、意味のない単語を連呼していることを知られたくなかった。母には難しい単語を言う我が子と思ってもらいたい。だから私が時々コカコーラと連呼することは母には隠していた。コカコーラと声に出すと、凄くリラックスできるのだ。私にとってコカコーラという単語は、今日一日の終わりと、明日への希望を、なんとなく感じさせてくれるものだった。

数年経つと母の身体はボロボロになりはじめた。性病を繰り返し、どんどん痩せていった。一

度警察に摘発されたこともあり、それ以来、母は電柱に隠れて客引きをするようになった。痩せた母の身体はすっかり電柱に隠れ、二度と警察に摘発されることはなかった。ほどなくして母は死んだ。死因などは知らない。とにかく母は私の人形のようにすり減ってしまったのだ。男たちによる性器の摩擦によってすっかりすり減っていなくなってしまう。世界から母が消えてしまった。いつも泣いていた母、時々イカされていた母が鮮烈に記憶に残っている。今思えば、母はボロボロの人形を縫い合わせていたときが一番幸せそうだった。鼻を逆さに縫い合わせたり、右手と左手を同じ側に縫い合わせたりしていたのは、もしかしたらストレスを解消するためだったのかもしれない。今、私の記憶の中でボロボロになった母を、少しずつ縫い合わせていかなければいけない。母を破滅に向かわせた父、母の身体を楽しんだ男たち、母に起こった悲劇のすべての原因であった私。それらすべてを縫い合わせなければならない。母のことを縫おうと思った人間は1人もいないのだ。

私はどうしてもうまく歩けない。でも歩かなければいけないのだ。私は歩くとどうしてもすぐに壁に激突してしまう。うんこを踏むし、車に轢かれそうになる。でもどちらにか進まなければならないのだ。鼻が逆さについていようと、首が後ろ向きについていようと、大した問題じゃない。今のところ真っすぐにさえ歩けない。もしかしたらすでに手と足が逆についているのかもしれない。目が見えないので確認もできない。

「コカコーラ、コカコーラ」

ふと私は大きな声で叫んだ。世界中の人に分かる単語だ。予想通り世界中の人がざわざわと私に振り向く音がした。途方もない物々交換の始まりだ。世界中のすべての人に、私は今からいくつもの嘘をつかなければならない。

「コカコーラ」

私は違う。こんなはずではない。これは詐欺だ。世界中を相手に詐欺を働くのだ。

高速耐久レース

時間がない。すごいスピードであいつを出し抜く、それが、私のやることだ。私は天才科学者として、いや、私は天才美人科学者として、いや、私は天才愛され美人科学者として、いや、私は天才グラマラス愛され美人科学者として、いや、私は天才グラマラス愛され夏モチ美人科学者として、いや、私は天才グラマラス愛され夏モチ胸キュン美人科学者として、いや、私は天才グラマラス愛され夏モチ胸キュン美人カワイイ科学者として、いや、私は天才グラマラス愛され夏モチ胸キュン美人カワイイOL科学者として、いや、私は天才グラマラス愛され夏モチ胸キュン美人カワイイOLキラキラおしゃれ科学者として、いや、私は天才グラマラス愛され夏モチ胸キュン美人カワイイOLキラキラおしゃれ小顔科学者として、いや、私は天才グラマラス愛され夏モチ胸キュン美人カワイイOLキラキラおしゃれ小顔etc科学者として、あいつを出し抜くことが義務付けられていると言っている。それは歴史的にも義務づけられていると思われる。というのも、あの中世初期の暗黒時代に世間から軽んじられていた一人の高邁な魔女が、庭の一角にさしてあった一本の棒に対して何故か心を奪われ、ひとしきり話しかけた挙句、何も返事がないことを悲しく思い、涙を流す日々を送っていると、愚かな世間はその泣き声を不快と思い、当時の王へ訴えて、最終的に魔女は庭の棒に張り付けられ刑死してしまったという伝説を代々伝え聞いてきたからであり、一本の棒は「柱」と呼ばれており、その「柱」に魔女を括り付けたのが当時の王の忠実な配下であったゴラティアスであり、そのゴラティアスの13代目の子孫であるあいつ、つまりゴルゴンドラ3世であり、ゴルゴンドラ3世は科学者の中でも最低の科学者、人類を破滅へと導く、マッドサイエンティストであり、つまり私は天才科学者として、いや、私は天才美人科学者として、いや、私は天才愛され美人科学者として、いや、私は天才グラマラス愛され美人科学者として、いや、私は天才グラマラス愛され夏モチ美人科学者として、いや、私は天才グラマラス愛され夏モチ胸キュン美人科学者として、いや、私は天才グラマラス愛され夏モチ胸キュン美人カワイイ科学者として、いや、私は天才グラマラス愛され夏モチ胸キュン美人カワイイOL科学者として、いや、私は天才グラマラス愛され夏モチ胸キュン美人カワイイOLキラキラおしゃれ科学者として、いや、私は天才グラマラス愛され夏モチ胸キュン美人カワイイOLキラキラおしゃれ小顔科学者として、いや、私は天才グラマラス愛され夏モチ胸キュン美人カワイイOLキラキラおしゃれ小顔etc科学者として、あいつを出し抜くことが義務付けられていると言っている。清く正しい科学的な発明、それが、私が皆へと送り返す最大のプレゼントである。「皆に光あれ」、「私に光あれ」、そう連続して唱えてもいい。その連続性を ϵ - δ 論法によって証明してもいい。見ろ、世の男たちよ、私の艶やかな身体を、特にロケットおっぱいと呼ばれる素晴らしいボディラインを、15万円払ってから見ろ、私の曲線美を、私の美脚、私のニーハイによって作りだされた神的な絶対領域を、ゴルゴンドラ3世など私の前では一人の蛆虫に過ぎない。一人の蛆虫が輩出したふた巻のとぐろ巻く排泄物に過ぎない。一つの奇跡が私の中で体現していることがわかるだろう。ある種の高級料理のように、食べることすら躊躇われる私の身体を、当たり前だが食べたものはいない。私はゴルゴンドラ3世をはじめとした愚劣で野蛮な男共に近寄られるほど気位の低い者ではない。私は高貴である。私は天才科学者として、いや、私は天才美人科学者として、いや、私は天才愛され美人科学者として、いや、私は天才グラマラス愛され美人科学者として、いや、私は天才グラマラス愛され夏

モテ美人科学者として、いや、私は天才グラマラス愛され夏モテ胸キュン美人科学者として、いや、私は天才グラマラス愛され夏モテ胸キュン美人カワイイ科学者として、いや、私は天才グラマラス愛され夏モテ胸キュン美人カワイイOL科学者として、いや、私は天才グラマラス愛され夏モテ胸キュン美人カワイイOLキラキラおしゃれ科学者として、いや、私は天才グラマラス愛され夏モテ胸キュン美人カワイイOLキラキラおしゃれ小顔科学者として、いや、私は天才グラマラス愛され夏モテ胸キュン美人カワイイOLキラキラおしゃれ小顔etc科学者として、あいつを出し抜くことが義務付けられていると言っていい。何しろ、私はあいつを出し抜くことが義務付けられていると言っていい。私はメガネ美女の一人として、あいつだけは出し抜かなくてはならない、研究生活においても、私生活においても、あいつを出し抜いて、あいつには届かないような高みにまで達しなくてはいけない。愚かな男よ、愚かだ、馬鹿だ、本当にくだらない、この現実とかいう、くだらない、くだらない、あの世界の中で、本当にくだらないことばかりを追い求め、私を喜ばせていると思っているのだろうか、本当にくだらない、ある日、あいつは私を本当にくだらない方法である種の落とし穴に落とそうとした、そうだ、本当にくだらないあいつは私をくだらない方法で、ある種の落とし穴に落とそうとした。あいつは満面の笑みで私をある種の落とし穴に落とそうとした。それが、私の役割だとかいうのだ、私の喜びはあいつの落とし穴に落ちることだというのだ、そして、私はそれによって喜ばねばならないとかいうのだ、本当にくだらない方法で、私をある種の落とし穴にあいつは私をある種の落とし穴に落とそうとした。あいつは私の絶対的な身体について非常に興味を持っており、私の方をちらちら見ていたが、私はあいつがいうことの一切を嘲笑の対象とした。なぜならあいつはくだらない方法で私を落とし穴に落とそうとしたからだ。特にあいつは自分の行いが私を喜ばせていると勘違いしていたが、私はあいつが「俺は自分の行いがお前のことを本当に喜ばせているとは思っていないし、それは自覚している。」と私に言ってきて、そのことを自覚していることがあたかも偉いのだという感じで私に言ってきて、その言葉によって、さらに私が喜ぶはずだと確信しているという感じであったので、私はあいつがとりわけ愚かであるということを完全に把握したのであった。本当にくだらないのだ、私がいつの日にか神にたどり着いた暁には、まずはじめにあいつに鉄槌を、神の雷電を、神罰を下すだろう。それがあいつに相応しい贈り物であり、愚かなあいつがまだましになるための一つの煉獄的機能を果たすだろう。特にそれを行うための条件としてスピードが速いということが大切なのである。つまり、超速であいつを出し抜くために私はあらゆる努力を惜しんではいけない。私は私の先祖が受けた仕打ちを、一つの愛を罰で報いたあの王の子孫たちをすべて打ち滅ぼすためには、どんな努力も惜しまない、不退転の決意である。あいつの身体に私は硫酸と罵声を同時にかけるだろう。それによってあいつの身体から臭い煙が上がろうとしてもである。二つの大きな鍋を用意するだろう。その鍋には2本の柱を立てる。柱の一方から一方へ私はニクロム線を括り付けるだろう。同じように一方から一方へ一つの導電物質を橋渡すだろう。ある液体を一方の鍋に入れ、同じようにもう一種の液体を鍋に入れる。それを二つの鍋に対して行ったとき、私はニクロム線が天上の階段のように見えることだろう。「アモーレ、世界」いざとなったら私は自分の身体が最大の権力になるということを知っている。私の心をいったい誰が知るといふのだろうか、いわんやゴルゴンドラ3世をや、そうだろう？あいつは私の敵、敵以下

のものである。特に近寄らせるべきではない、私はとりわけ高貴な存在であるのだから、あいつはとりわけ愚劣な存在であるのだから、私はあいつには一切近寄らないが、私の業績の一切があいつを押しつぶすだろう。私は忘れない、私のはるか昔の祖先である一人の美しい魔女が柱にくくられて死んだことを。私は忘れない、その魔女の血が私にも流れていることを。そして私は忘れない、私が天才的な美人科学者であることを。

歯が欠けるほど噛み付いた。とんでもない悪党だったからだ。よそ行きのネクタイを締めて、悪党たちは秩序を破壊していた。とてつもない猜疑心に私は噴飯し、悪党を1人残らず噛み殺したのだった。

犬にももしかしたら理由があったのかもしれない。犬も最初は従順な猫だったのかもしれない。たしかにパブロフは従順に私たちの行為を眺めていただけだった。よほど私たちのことが好きだったのだろう。

肉が裂ける音が聞こえた。裂けてしまうと悪党といえども従順なカモメだ。一人残らず裂けてしまう。脳みその先っぽまでつまった悪などないらしい。みな弱者、命のシモベ。

パブロフの様子がおかしくなったのは、私が電柱の話をしたあたりからだった。話の内容は他愛のないことだ。近所にある電柱の高さが、どうも高くなっているんじゃないか、という話だったんだ。我が家が二階だからちょうど目の前に電線が来る位置なんだけどね、どうもその電柱一本だけが延びたらしくて、電線が斜めになっちまってるんだよ。ようするに「山」という字みたいに高さが合わないから、電線が斜めになっているわけなんだな。

悪党にも赤い血が流れているらしい。血は肉の咀嚼を助けてくれる。肉だけにかぶりつくわけにはいかない。ただこの悪党は骨密度が低いらしい。骨がやけに柔い。そして白い。朱鷺と同じくらいの白さだ。そして朱鷺を私は知らない。

そういえばパブロフはその電柱に毎日必ず小便を引っ掛けていたな。散歩コースなんだろう。彼にとっては縄張りのつもりなのか、ぜったいに小便を引っ掛けていた。おそらく1km手前で本当は小便を引っ掛けたいときは、歩きながら必死に我慢していたんだろうし、まだとても小便を出すほど溜まってませんよ、というときも、必死に無理をして出したんだろう。

遠い昔のことだ。私にも母というものがあつた。母は6匹の犬たちを一度に産んだ。兄弟はそれぞれ生き別れになった。そうなるものだったからだ。母は今も生きていたのかもしれない。死んでいたとしてもどうせもう二度と会えないのだから構わない。

溜まっていない時のパブロフは、なかなか出ない小便にうなり声をあげた。早く出さないと飼い主に引っ張られて小便を引っ掛けるタイミングを失ってしまうのだから。ただそんな光景は微笑ましいものとして私は見ていたんだ。犬というのは大抵、そういうものだからね。<

母は私たちを産んですぐに行方不明になってしまった。どこに行ったのか分からなくなってしまった。飼い主が必死に探したが見つからなかったらしい。どこかで死んでしまったのかもしれないし、誰か別の飼い主に飼われているのかもしれない。

私はその延びた電柱を調節しなければ、いつか電線が切れてしまうんじゃないかと心配したのだ。だって電線の長さは電柱が伸びる前と変わっていないんだから。とにかく電柱が伸びているのは間違いがなさそうだし、そうであるならばこれから先も伸びないという保証はない。

最初は母のことを恨んだよ。だって子供たちを全部すっかり置いていったんだからね。それと同時にとても寂しかったよ。やはり母親がいないと駄目なんだね。それは飼い主も同じだったみたいだ。飼い主は母親のことを何年も飼っていたから、とても必死に母親のことを探してくれた

んだ。

私は電気会社に電話をかけて、状況を説明した。どうにも電柱が伸びているらしいということ。電気会社の男は電柱なぞ伸びるわけがないと言ったが、とにかく一度来てほしいと私が言うとうすぐに飛んで来た。そしてあなたの言う通り、これは伸びてますね、と言ったのだ。

おかしいことを言う客もいるもんだ。電気会社に勤めるミツマメは思った。電柱が伸びているとかね。そんな電話だったんだもの。確かに田舎町だから電柱と言っても木で出来ている。木だからと言って伸びるわけがない。ミツマメは上司に説明し、暇だったのですぐに現地に行くことにした。<

飼い主は知り合いという知り合いに電話をしてくれたし、自分で紙に搜索願を書いて電柱に貼った。それでも見つからなかった。しばらくすると飼い主は母を捜すことを諦めたようだった。私たち6匹を育てるのに必死だったんだろう。やがて他の5匹は別の飼い主の元に送られた。私だけがその飼い主に飼われ続けている。

電気会社の男は、電柱が伸びたことが本当に不思議なようだった。そして至急上司に報告して、すぐに電柱の高さを元に戻します、と言った。大慌てで彼は会社に戻っていった。確かに不思議だ。木の電柱だからといって、パブロフの小便で伸びるわけじゃあるまいし。

伸びてしまった以上、電柱を管理している我々が短くしなけりゃ仕方ない。放置して本当に電線が切断したら、余計に厄介なことになる。ミツマメは上司に報告した。そしてすぐに電柱を短くする工事が行われることになった。

いつも散歩する道で、その母親の搜索願が貼られていた電柱はその一本だけだった。だからその電柱に愛を込めて小便を引っ掛けることが日課になった。木はいつか伸びる。この木が天まで伸びてくれたら嬉しい。

すぐに電気会社の人間が来て、電柱の工事が始まった。工事はあっさり終わった。拍子抜けするほどだった。木の電柱はなくなり、コンクリート電柱に変えられた。部屋の窓の視界が元通りに戻った。電線はいつものように地面と平行になった。これが本来在るべき姿だと思うととても満足した。

ミツマメ指揮のもと、電柱の工事が行われた。木の電柱は取り除くことに決まった。今さら長さの調整などしているのはバカらしい。どうせいずれはコンクリート電柱に変えるのだから。ミツマメは手際よく電柱仕事を終わらせると、会社に戻っていった。

5-1

皆さんは『奨励会』という将棋のプロ棋士養成機関をご存じだろうか。本小説の主人公は、この『奨励会』に入ろうとしたこともあった愛知県出身のトラック運転手小池重之介さんの友人である会社員加藤浩美さんの部下の谷川俊三郎さんの息子である。その名は谷川光太郎。光太郎は小学校時代サッカー部に所属。運が良かったときは試合に出場できるぐらいの実力だった。中学校時代はテニス部に所属。運が良かったときは試合に出場できるぐらいの実力だった。そして、高校時代は一転して美術部に所属。幽霊部員として活躍した。大学に入ると性欲が抑えきれなくなり、最もエロいとされるテニスサークル（=合コンサークル）に所属し、中学時代のテニス経験を活かしてペニスを振り回した。そして、大学を留年。一度留年すると気が大きくなってしまふのか、最終的に四留してしまうという一流の留年大学生となった。ちなみに卒業論文は『J-POPにおける安室奈美恵の立ち位置について』である。その卒論の書き出し「私が一番好きなアーティストの安室奈美恵について色々と思いつく限り書きたいと思います。特に感じたこと（心に響いたりリックとか）について書こうと思います。書いてあることは私の独断と偏見なのでほとんどが間違っているかもしれません。だけど、私の安室奈美恵を思う気持ちはとても大きいからみんなは許してくれるだろうと思います。」は、ついにパラダイムが変化したと大学教授たちを震撼させた。結局、受け取ってもらえなかった卒論を後輩に無理やり書き直させて、5回目の提出で何とか承認され、晴れて卒業することができたのだ。日本の大学、万歳。

5-2

谷川光太郎の前半生については以上であるが、読んでない人や読み飛ばした人たちのために一言で要約すると、「非常に一般的な人生をおくる者がいた」となる。光太郎は将棋とは縁のない人生を歩んできた。少なくとも大学生までは将棋の駒に触れる機会は一度もなかったのである。一度も将棋の駒に触れないということはあるいは難しいことだったかもしれない。興味がなくても一度くらいは将棋の駒に触れる機会があるものだ。しかし、何の因果か光太郎は将棋の駒に触れる機会はなかった。そして、今後も一度も将棋の駒に触れることなく彼は死んでいくのだが、それは後々に話すことになるだろう。大学を卒業した光太郎は就職することもなく、しばらくマンガ喫茶に入り浸る生活を送った。インターネットで容易に世界中の人々と将棋のネット対局ができるのだが、光太郎はそうすることは一度もなかった。ある日のマンガ喫茶の早朝、寝不足で朦朧とした彼は道路で車にはねられてしまった。幸いにも大事には至らなかったが、3か月の入院生活を送らねばならないこととなった。彼は近隣の大学病院に入院したのだが、このことが彼の個人史の中では最大の山場である。これ以上の山場はついに彼の人生には訪れなかった。しかし、これは彼の人生に起こった出来事が一般的に言って希少な出来事であるかどうか、あるいは彼の人生に起こった出来事が世間的に言ってプラスとされるものかマイナスとされるものかといった観点からの評価であり、彼自身の考える山場はまた別の時期にあったのかもしれない。それについて、私は知らない。なぜなら、彼に会ったこともなければ、話したこともないからだ。ただ、彼の声は聞こえているような気がする。おそらく聞こえている気がするだけだと思うが

。確証は何一つない。実に感覚的な話だ。

5 - 3

光太郎の入院生活について書く前に、看護師（女性）という職業がエロいニュアンスを帯びているという世間一般の男性の感覚に私は全く共感できなかったと告白しておこう。私は病院から連想される血のイメージと、医者に纏わりつく数々の刃物と針と薬品のイメージが邪魔をして、そうしたものと関連している看護師をエロい目で見ることができなかった。しかし、看護師モノのアダルトビデオは2500本ぐらい見ており、そのすべてで自慰を行ったことは間違いない。2500本の中から選りすぐりの10本を選べと言われれば、即座にそれを実行できるだろう。それでもなお、私は看護師をエロい目で見ることができなかったと主張しよう。きっと皆さんは私を信じてくれるだろう。何故なら、自分の行いと自分の理想とする考えが一致しないなどということは、ほとんどすべての場面で生じてくる事態だからである。私は右に行くと言いながら左に行くだろう。それは左に行こうとしていたからである。これは嘘を言ったわけではない。右に行くと言ったが、それは左に行くと言ったことと等価であったのだ。右に行くという理想を抱きながら左に行くことは実に容易である。純真な娼婦ということを描いてドストエフスキーだって描いているのではないか。つまりは右に行きながら左に行くということである。

5 - 4

前置きが長くなってしまったことをここに謝罪しようと思う。私が行うことは谷川光太郎の入院生活について説明することである。そして、その入院生活が如何に将棋の世界から離れていたかを皆さんに伝えること、それこそが私の使命であり、義務なのである。それが谷川光太郎という人物と全く関わることはなかった赤の他人としてなすべき最大の行いである。私は光太郎が本当に病院に入院していたかどうか確かな証拠を持っているわけではないし、もちろん誰かから聞いたわけでもない。私は谷川光太郎の友人とも会ったことはない。その理由は、谷川光太郎という人物はこの小説の主人公であり、私はこの小説には含まれてはいない人物だからである。私は断じてこの小説に含まれてはいないだろう。このことを理解することは特に難しいことではないのだが、皆さんに理解されているのか多少心配ではある。だからこそ、まずは光太郎の入院生活について書いておこうと思うのだ。それは私が光太郎とは別の世界に住んでいるのだということ、物理的にも理論的にも感覚的にも証明してくれるだろう。

5 - 5

彼の入院生活について話すことは、実は数年前にも行っている。だから明らかにこれは非常に無駄な行いである。将棋のように無駄な行いである。同じことを繰り返すこととゲームを生涯の職業にすることは同様の負のニュアンスを背負っている。つまり無駄という負のニュアンスをだ。無駄という言葉が皆を打ちのめす。しかし、棋士のすべてが自らの職業に誇りを持っているのは、この無駄というニュアンスに対抗する何らかの道具立て・武器を手に入れているからである。彼らは必ず馬鹿者にこう言われてきて過ごしただろう。「将棋って何の役に立つの?」と。棋

士全員が「ふざけんな」と言うだろう。こうした発言には「ふざけんな」と言わなければいけない。イチローは「最高の野球のプレーヤー」であり、決して「棒にボールを当てることがとてもうまい人」ではないのと同様に、棋士は「文字の書いてある木を置いたり置かなかったりする人」ではない。こうした馬鹿者が出てくる背景には、「役に立つ」という概念がすべてに先立つ第一原理になっているということがある。私は「役に立つ」ということをすべての出発点としない何らかの考えを創出したいと考えている。それは棋士たちの心の支えがなんであるかを抽出して一般化する作業によって実現できるだろう。

5 - 6

話が混乱してしまった。それは私が混乱しながら書いているから当然である。だから、ここで一度整理しておこう。私は「役に立つ」ことを価値基準とする体系とは逆の体系を發展させたい。そのためには「役に立たないこと」を職業としている人々、とりわけゲームを職業としている人々、その中でも特にマイナー文系ゲーム的な将棋を職業としている人々の心に分け入り、そのアイデンティティを支えている強固な精神を抽出して一般化することで、「役に立たないこと」を正当化することが必要である。それを具体化する方法として、谷川光太郎という人物を選んだのだ。ここでの問題点は既にわかっている、谷川光太郎は将棋の棋士ではないばかりか、一度も将棋に関わったことはないという事実である。これは完全に私の人選ミスである。間違えた。私は昨今の電力会社のように基本的な方針を間違えてしまったのである。しかし、一つの発電機が一本の電柱を使用して一人の人間に電力を届けるわけではない。私は二つ目の発電機を準備した。「役に立たない」こと、それが二つ目の発電機である。そして、それによって起こした電気を一本の電柱ではなく複数の電柱を用いて複数の人間に配ったのである。

草以外のモノ

草以外のモノ

難しいのは、自分のことをあたかも書いていないかのように書くことである。今から、30分以内に、私は自分のことを書かずに、自分以外のこと、それも最も自分から離れているだろうことを書かねばならない。そうでもしないと、これから30分以内に、いや、正確には36分以内に、隙間を埋めることなど覚束ないだろう。重要なのは隙間を埋め、ノルマをこなすことである。今のところ、ただノルマをこなすことのみが気が奪われており、隙間に詰め込むものは中身のないフワフワした綿ぼこりみたいなものでしかない。だが、この仕事を続けることによって、ノルマがノルマでなくなり、隙間を埋めることが隙間を埋めることと意識せずに隙間を埋め始めることができたとき、私は隙間に詰め込むものを黄金に変えることができるだろう。そうすることで、自動的に私は自分のことをあたかも書いていないかのように書くことが容易にできるようになるだろう。そうこうしているうちに、もう残り31分しかない。時間は迫っている。止まっている余裕は全くない。本来は推敲という作業が必要なのだが、今はそうしたことを考慮する時間が一切ないのである。私は自分以外のことをまず見つける努力をしてみたいと思う。自分の心中を吐露したりなど、決してしないような、非人間的な物、そう物がいい。モノとカタカナで書いた方がしっくりくる。そうだ、モノについて書くべきである。私はモノについて書く。それが、今から残りの29分間、私が生き残る方法となる。私は生き残らなければならない、この言葉は私が最も嫌いな言葉である。しかし、どこからか戦わねばならないなどと私に向かって叫んでいるやつが複数いることは事実である。私は生きることにはやぶさかではない。しかし、生き残ることとなると厄介だなど思ってしまうのである。だが、私は生き残らねばならない。あと25分しか時間がない。ここから脱出する方法を考えるには短すぎる時間である。とりわけ、広大な広場の中にただ一人放り出された私には、ここからどうやって脱出すべきか、何の方策も立っていない。ただわかっていることは、自分以外のことを書くことによって、ここから脱出できるだろうということである。だから、私はさっき報告したように、私以外のこと、私から最も離れたモノについて書こうということを決めたのである。あと23分しか時間がない。どうだろうか、私は目的を達成できるだろうか。おそらく達成できないだろう。しかし、続けなくてはいけない。これは苦行である。私にはどこからかノルマが課せられた。そしてそのノルマをこなさなくてははいけない。そのノルマから逃げることはできない。なぜなら、私はノルマをこなすために広大な広場の中心に放り出されてしまい、周囲には、私の故郷への電車はおろか、自動車一台も見えないばかりでなく、そもそも、線路も道路も何にもないからである。見えるのは草、草、草、草だけである。草しかない。私は草について書こうかと思ったが、私には草は身近な存在のようにも思え、当初の目的である、私以外のことを書くことからは、外れてしまうような気がしているのである。だから、私はあと19分以内に草以外で私から最も離れているモノを探し出し、それについて克明に記さねばならない。克明にである。本来の自然主義的な文章で、私は草以外の私から最も離れているものについて、克明に記す義務があるのである。これを成し遂げれば、場合によってはいくらかの収入に結びつくかもしれないし、運が良ければ、高名な大人物に見出されるかもしれない。ヘッドハンティング、そういう可能性も捨てきれない。あと16分以内に高名な大人物に発見されるように私は奮起しなければならない。おおよそ奮起するためには何らかの方法が必要である。馬だって、目の前に人参があれば、本来以上の能力が発揮されるのだ。だから、何か、私を奮起させてくれる道具も併せて探さねばならない。あと15分以内に、私は私を奮起させる道具と草以外の私から最も離れたモノを探さねばならない。奮起させる道具は同条件を持っている必要があるのか。それは私が人間である限り自明である。それは愛である。会い以外にはないだろう。愛だけが私を奮起させるのである。決して性欲ではない。性欲を満たそうとしても、現在の私の周りには草しかないのである。性欲の強い人は草さえあれば、性欲を満足させることができると私に強く意見してくるかもしれない。しかし、私には草によって性欲を満たすことは不可能ではないにしても、およそ12分以内には草では

性欲を満足させることは難しいだろうと思えるのだ。だから私は性欲を満たすことではなく、愛を動く原動力とする所存である。愛ならば、私はあと11分以内に探し出すことができるような気がするのである。性欲を満たすことより、愛を見つけることの方が簡単である、そんな言葉を誰が信じてくれるだろうか？だが、私はそう信じているのである。あと10分以内に私は愛を見つけ出し、それを原動力として、草以外の私から最も離れたモノを探し出し、それについて克明に記すことで、私は私のことをあたかも書かないかのように書くことができ、それによって、私はノルマを達成できるだろうと思う。そのノルマを達成した時が私の死の時間であり、私の生まれかわりの時間である。私は新しいステージに到達するのである。こちら側からあちら側へ反転するのである。私は今までの文章が人の心に傷を負わせるかもしれないことには気づいているつもりだ。何かを予感しているからである。何を予感しているのかはよくわからない。しかし、この文章でその予感を乗り越えられると思っている。何の予感だかはわからないが、嫌な予感、いい予感、どちらかもわからないが、どちらとも関係ないステージにたどり着けるだろうと思っている。あと4分以内に私は愛を見つけるだろう。それは実に予定調和的に行われるだろう。というのも、私の動きは実に時間と一体になっているからである。私は今まで約30分の間、ほとんど時間と共に過ごしてきたと言ってよい。ほとんど私が時間であると宣言してもよいくらいである。私は時間と兄弟であるというよりも、時間と双子であると言った方が適切である。しかも、私は分裂前の受精直後の双子、まだ生まれていない、一体である双子である。私はあと1分で分裂し始めるだろう。もう秒読みは始まっている。私はもうすぐ分裂する。そして私は愛を手に入れる。そう、私はもう愛を手に入れている。そして、私は草以外のモノも手に入れている。それは電柱である。それは電気を運ぶ代わりに景観を崩すものである。何か別のモノの方がいい、電柱ではなく、何か別のモノの方がいい、電気を運ぶ代わりに、愛を運ぶ、電柱以外のモノがいい。

電柱にまつわるエトセトラ

<http://p.booklog.jp/book/30404>

著者：合成写真

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/goseisyashin/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/30404>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/30404>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.